

小学校外国語活動について

渡邊時夫（信州大学名誉教授）

1. はじめに

小学校「外国語活動」で英語を学んだ児童は、中学校での英語教育に大きな期待や夢を抱いて入学してまいります。中学校では、「英語によるコミュニケーション能力の素地」を習得していることを前提に、生徒の英語力を最大限に伸ばしてあげる教育を考えなければなりません。

本欄では、「外国語活動」について一層深く理解し、小学校における外国語活動の実態を把握し、あわせて小中英語教育の好ましい接続や連携の在り方についてまとめます。

2. 「外国語活動」必修化までの流れ

「外国語活動」を正しく理解するために、必修化までの流れをまとめます。

- (1) 1992年に文部科学省が大阪市立真田山小学校と味原小学校の2校を「英語学習を含む国際理解教育」の研究開発学校に指定される。
- (2) その後、研究開発学校の数を徐々に増やし、1996年には各都道府県に、1校を研究開発学校に指定される。研究開発学校とは別に、教育特区という形で英語を導入する地区も次第に増加。
- (3) 1998年の学習指導要領改訂により、「総合的な学習の時間」が創設され、2002年度から小学校では「国際理解に関する学習の一環として外国語会話等」が実施可能になる。
- (4) 以上の状況から2006年度までには、全国の小学校のうち、95%ほどの学校が何らかの形で英語活動を実施しているという実態が明らかになった。興味関心が高く、音声に敏感な小学生対象の英語教育導入への期待が次第に高まる。
- (5) この間、中央教育課程審議会においては、今回の学習指導要領改訂にあわせ、英語教育の小学校への導入について回を重ねて検討された。その結果、2007年11月7日に「教育課程部会におけるこれまでの審議のまとめ」（中央教育審議会 初等中等教育分科会 教育課程部会）が公表され、2008年2月15日に文部科学省から「幼稚園、小学校、中学校の学習指導要領の改訂案」が発表。これらのプロセスを経て、2008年3月に新しい『学習指導要領』が告示され、小学校高学年に「外国語活動」として各学年年間35時間英語教育が必修として導入されることになった。ただし、「外国語活動」は「教科」ではなく、道徳と同様「領域」のため、検定教科書は存在しません。「外国語活動」は中学校と合わせ、学習対象となる言語は英語を基本とすることになっている。
- (6) 2年間の先行実施期間を経て、2011年度から全国一斉に「外国語活動」が実施される。

3. 「外国語活動」が必修となった理由—『教育課程部会におけるこれまでの審議のまとめ』より

「教育課程部会におけるこれまでの審議のまとめ」には、主として下記の理由が挙げられています。

- (1) 全国にある小学校およそ23,000校のうち、何らかの形で英語を実施している学校は95%内外にのぼっている。
- (2) 学校により実施時間のばらつきが大きい。年間3～70単位時間（6学年の年間平均実施授業数13.7単位時間）であり、教育の機会均等の原則に触れる可能性がある。
- (3) 特別な教育条件が許されている教育特区の数が急増した。

- (4) グローバル化の急速な進展により、国際協力が求められる時代になった。
- (5) 近隣諸国を始め東南アジアの国々や EU 諸国など、国家戦略として小学校から英語を実施する国が急増している。

4. 「外国語活動」の学習指導要領と中学校英語科への影響について

- (1) はじめに一『英語が使える日本人の育成に関する戦略構想』について

小学校学習指導要領の改訂における「外国語活動」を検討する前に、日本の英語教育改革の直接的な発端となったともいえる提案がありました。それは、遠山敦子文部科学大臣（当時）の『英語が使える日本人の育成に関する戦略構想』（2002年7月）です。この提案の中で、その後の英語教育の変化に直接影響したものに、次の4つが考えられます。

- ① 生徒が英語に触れる機会が少な過ぎる（教育場面においては、英語教員の英語使用力が乏しい）。
→英語教員の資質向上という視点に立って、翌年の4月から5年間のうちに、全国の中高の英語教員60,000人が徹底した研修を受けることになった。
- ② 2006年度から大学入試センター試験にリスニングの導入。
→計画通り2006年度から実施された。
- ③ スーパーイングリッシュ・ハイスクールの推進や高校生の海外留学制度の充実。
- ④ 小学校に英語を導入することの検討。

この他としては、ALTを増員する、という提案がありましたが、この提案だけは実施されませんでした。

このような英語教育改善の構想を支える考え方は、「英語が使える日本人を育成するには、子どもたちには早い内から英語に直接触れて親しませることによって、その後の英語によるコミュニケーション能力育成のための土台・素地を築いてやろう」であることが明確です。

- (2) 学習指導要領の理解のために「外国語活動」に関する指導要領より
小学校5,6年生の共通の目標は次の通りです。

【目標】

外国語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませながら、コミュニケーション能力の素地を養う。

この目標を分かりやすく分析すると、次のように3つにまとめることができます。

- ① 言語や文化について体験的に理解を深める。
- ② 積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図る。
- ③ 外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませる。

- ① 「言語や文化について体験的に理解を深める」ことについて

言語—ことばについては、日本語と英語との違いなどを体験的に学びます。例えば、手や足の指の名称についても、日本語と英語とでは違っているし、bananaはカタカナ語とは全く発音が違っていることなどを体験して、ことばの不思議さに気づきます。さらに音声について、英語は

Stress-timed rhythm であるのに対し、日本語は、Syllable-timed rhythm であることなどを、理屈でなく、経験を通して理解を深めます。また日本語では「葉（歯）が黄色い」を発話するとき音の高低を微妙に変えて使っていることなどに気づき、英語を通じて、母語についても新しい発見を重ね、ことばの面白さや不思議さ、コミュニケーションの大切さや難しさを学んでいます。

文化については、文化の多様性を体験的に学びます。“Good morning.”と「おはよう」とは日英語の表現の違いだけでなく使い方も違うこと、握手とお辞儀、数の数え方、相手の名前の方、eye-contact のことなど、子どもたちが、実際に体験しながら、また世界の人々と日本人の生活習慣の違いに気づきながら、次第に世界の人々の多様なものの考え方、生活習慣に対して興味を持ち理解を深めていくことをねらいとしています。例えば、干支を題材にする場合、中国でも干支を用いていること、しかし、イノシシの代わりに豚を用いていること、ベトナムではネコも入っていることなどに気づき、国や地域による習慣や価値観の共通性や異質性を学びます。

② 「積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図る」ことについて

日本人が英語を話すことが苦手だった理由の1つは、言語によるコミュニケーション活動に消極的だったためだと考えられています。そこで、自意識が過剰にならない小学生に対して、積極性をさらに高める教育が必要と考えられています。単に発話数を増やすだけでなく、相手の話すことをじっくり聞き、相手の意図を的確につかむとともに、自分の考えや意見を明確にし、簡潔に相手に伝えることができ、また、そのようなコミュニケーション活動を楽しみと感ずるような子どもを育てることをねらいとしています。

③ 外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませることについて

外国語活動では、発音や単語や文法や綴り字を勉強することが目標ではありません。先生のジェスチャーや表情、実物・絵・写真・地図・ビデオ・その他の映像などをヒントに、推測力を働かせて、先生やDVDなどの英語を理解し、ことばや文化について「気づき」の力を育み、知り得たわずかの英語を使って自己表現ができる、といった教育効果を目指としています。正確な発音にこだわったり、単語やspellingsを覚えさせたり、基本文を暗唱させるなどは目標としていません。

このことについては、学習指導要領の『解説書』（文部科学省 平成20年8月）の中で、目標は最初の①と②を前面に出す形で、まとめられています。①と②は、「外国語（つまり英語）を通じて」行うことになっているからです。③は①と②を達成するために使う手立て・手段という考え方です。この点は、しっかり理解していることが大切です。

(3) 中学校指導要領（外国語）への影響について

中学校「外国語」は、平成23年度までの指導要領と比較すると、小学校「外国語活動」による様々な影響が出ています。主な部分を取り上げます。

- ① 「目標」の部分では、「外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しみ」という表現が消えました。この部分は「外国語活動」に回されました。代わって、「聞くこと、話すこと、読むこと、書くことなどのコミュニケーション能力の基礎を養う」となり、4技能のバランスを大切にすることとなりました。
- ② 「聞くこと」の部分では、「情報を正確に聞き取る事」となり、正確さが強調されるとともに、「まとまりのある英語を聞いて、概要や要点を適切に聞き取る事」が追加され、聞く能力の育成が強調されました。
- ③ 「話すこと」の部分では、「与えられたテーマについて簡単なスピーチをすること」が追加されました。これは、「外国語活動」の「コミュニケーションの素地」が前提となっています。

- ④ 「第 1 学年における言語活動」の部分では、「小学校における外国語活動を通じて音声面を中心としたコミュニケーションに対する積極的な態度などの一定の素地が育成されることを踏まえ、身近な言語の使用場面や言語の働きに配慮した言語活動を行わせること。その際、自分の気持ちや身の回りの出来事などの中から簡単な表現を用いてコミュニケーションを図れるような話題を取り上げること」となっており、「外国語活動」の成果を具体的に上げるよう、明確に求めています。
- ⑤ 「言語材料」の部分では、旧指導要領では、「季節、月、曜日、時間、天気、数、家族などの日常生活にかかわる基本的な語」を含めるよう規定されていましたが、この表現は削除されています。小学校で学習済みという想定に立っていると思われます。

5. 小学校の教育現場の実態

(1) 教材について

文部科学省が作成した『英語ノート』ならびに『Hi, friends!』は教科書ではありませんが、公立小学校に関する限り、多くの小学校で使用されてきています。ただし、『英語ノート』『Hi, friends!』だけを使用している学校はそれほど多くはありません。また、ALT が十分に配置されている学校は、そうでない学校と比べ、使用率は低い傾向があります。このため、特に複数の小学校の児童が入学してくる中学校の場合は、この点について、小学校と連絡を取り、情報を入手するなどの配慮が必要と思われます。

また、文部科学省は『英語ノート』の作成後、コミュニケーション活動を一層重視した教材づくりをしています。そして視聴覚教材、デジタル教材なども充実させてきています。中学校にあがってくる生徒は、このような教材を使って学習することに慣れていきます。

(2) 指導法について

概して、学習指導要領に沿って指導されていると思われます。つまり、視聴覚教材を活用し、リスニングを重視した授業を大切にしています。TPR を併用し、指導者の英語による指示にたいして、身体全体を使って反応する活動が多用されています。英語による表出は、控え目にする傾向があると言えるでしょう。ただし、子どもたちは、英語を話すことを喜ぶ傾向があることと、積極的にコミュニケーションを図るという学習指導要領の理念を活かすために、簡単な英語表現を使った活動も決して少なくありません。音声言語を主にすべきことから、文字を対象とする活動は盛んではありません。ただし、『英語ノート』『Hi, friends!』に、文字に焦点を当てた内容を扱っていることから、アルファベットの大文字・小文字はほぼすべての子どもたちが学習していると思われます。フォニックスの導入を意図的に行っている学校がありますが、市町村単位など、組織的に指導はなされていない、と考えてよいでしょう。

(3) 指導者

学級担任が中心になって授業を進める点は、ほぼ実践されていると思われます。ただ、指導者については 2 つの問題があります。

① ALT の配置が不十分の市町村や地域が多い

一村一校の場合は、比較的恵まれています。数十校を抱える大規模な市の場合には、主として財政の関係で ALT が十分雇えないケースが少なくありません。教育の機会均等という視点から見ても、問題がありそうです。

② 現職教員の研修が不十分

文部科学省による指導主事の研修 ⇒ 一校ひとり（研修教員）を対象とする指導主事による研修 ⇒ 研修教員による校内研修、がすでに終了したと考えられています。その後、研修が継続的に

行われなかったり、①とも関連したりもして、現状は英語が使えない教員が CD や『英語ノート』『Hi, friends!』のデジタル版を頼りに教えているケースが多いようです。

6. 中学校側の対応と小中の連携について

以上の説明から「外国語活動」の成果について、およそ理解いただけたと思います。

(1) 聞く力について

新入生は、妥当なヒントが十分に与えられれば、英語教員の話す英語を集中して聞き、細かい部分は別として、概要については、かなり理解できる力を身に着けています。

(2) 表現力について

『英語ノート』が提供する基本的な英文については、触れた程度で、中学校の英語の先生の要求に沿って自由に使える、というレベルにはなっていないことを理解してほしいと思います。かなり充実した授業を行った小学校教員の評価によると、卒業時に、下記の英語を使って自己表現ができることが精いっぱいと言っています。

I am ~. I like baseball. I can play the piano. I am hungry now.

この他では、How are you? I'm fine. It's fine today. 程度だと思えます。

(3) 語彙などについて

多くの生徒が比較的身につけていると思われる語彙

- ・ 天気や気温に関する単語
- ・ 気持ちに関する単語 (fine, happy, hungry, sleepy など)
- ・ よく知られているスポーツ, 果物, 野菜の単語
- ・ 数字 (31 まで)
- ・ 月, 曜日, 季節の単語
- ・ 家族に関する単語

(4) 中学校教員に留意してほしいこと

- ① 中学校の最初の段階で、よく知っている上記の単語や文をあまりにも繰り返し指導しないことが必要です。今までも、「うんざりする」という生徒の批評を聞いています。
- ② フォニックスを学習済みと聞いて、あまり過大評価しないでください。スペルを書くという活動は皆無と考慮していただいた方がよいと思います。ただ、Saturday vs. Sunday など、いわゆる sight-words として、識別できる単語は結構多いかも知れません。その場合には、sight-words 識別力を上手に活用し、書くことの抵抗を乗り越えてほしいと思います。

(5) 小中の連携について

単に小学校の授業を参観するだけでなく、上に述べたような内容 (リスニング, スピーキングなどのレベル), 積極的な態度の到達度や問題点, などについて、小中の指導者両者がじっくり検討し合うことが必要だと思います。中学校に入学した生徒が、難なく中学校の英語の授業に参加できるだけで満足してはならないと思います。「外国語活動」の導入が、日本における英語教育の改善・改革に結びつかなければならないからです。